

アートによる新生ふくしま交流事業

主催：福島県

事業受託者：認定特定非営利活動法人 ドリームサポート福島

◆この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに達成された「福島県東日本大震災子ども支援基金」により実施しています。

アートで広げる 子どもの未来プロジェクト 2021

記録集

アートによる新生ふくしま交流事業

地域の活性化や子どもたちの心豊かな成長を図るため、地域住民や子どもたちが交流しながらアート事業を実施し、元気な福島の姿を発信する取り組みです。

創作活動を通して地域の魅力を再発見するとともに、人々の交流や生き甲斐の創出を目指す「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」及び、学校では体験できない創作活動を通して福島を担う子どもたちの心豊かな成長を支援する「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」により構成されています。

アートで広げる 子どもの未来プロジェクト 2021

福島を担う子どもたちに、将来「新生ふくしま」を推進する人材として活躍してもらうため、多彩なアートプログラムを体験できるワークショップを実施することで心豊かな成長を支援します。

CONTENTS

P2 **1** 私の大切なふくしまの風景
—アクリル画と言葉で、描く、綴る— 講師 齋正機

P6 **2** アート&サイエンスで
ふくしまの「大地」を描く 講師 渡邊晃一

P10 **3** タブレットで
おもしろフォト・アート 講師 高橋延昌

P14

みんなのアート作品展

(アートで広げるみんなの元気プロジェクト共同開催)

P16

新生ふくしま・アート・フォーラム

(アートで広げるみんなの元気プロジェクト共同開催)

1 私の大切なふくしまの風景 -アクリル画と言葉で、描く、綴る-

何気ないけど大切なふくしまの風景。じっくり感じ、観察し、円形の枠を使ってアクリル絵具で描いてみます。絵と言葉を通して、自分の大切なふくしまの原風景を探究します。

2021.12.22 wed いわき市 福島県立いわき総合高等学校



講師 齋正機

1966年、福島県福島市生まれ。1992年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業、1994年同大学院修了。喜多方市美術館で開催された「1998公募：ふるさとの風景展」において最優秀賞を受賞。その後も数々の絵画展で受賞を重ね、2003年に洋画界の登竜門とされる昭和会賞を日本画家として初めて受賞。2011年から毎年、東邦銀行のカレンダーに作品が採用されるなど、活躍の幅を広げている。



MASAKI SAI

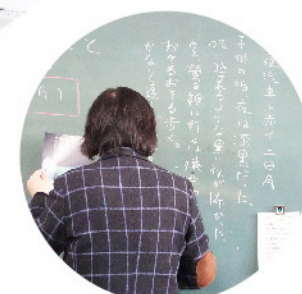
絵と言葉を通して、大切なふくしまの原風景を探究

絵と言葉を通して、大切なふくしまの原風景を探究し「私の大切なふくしまの風景」を描くワークショップは、いわき総合高校の美術部の皆さん(高校1年生から3年生)に、「自分にとっての大切な福島の風景ってなんだろう」と、思い返してもらうところからスタートしました。

10年前の東日本大震災時、皆さん

は5歳から7歳くらい。その後、いろいろな経験をされながら成長し、高校生になりました。

ワークショップでは、これまでの自分を振り返るだけでなく、まちや土地の風景、思い出も同時に捉え直し、さらに描くことを通して、自分といわき、福島の思い出や場所との関係、記憶などを一緒に形にしていきました。



いいきっかけになりました
ワークショップが地元を見つめ直す

福島県出身の詩人・長田弘氏(1939-2015)は、「福島の風景というものが自分を支えるものになってきていた」というようなことを、晩年書いておられたそうです。齋さんは、今回のワークショップに参加した生徒の中にも卒業後、いわきを、福島県を離れていく子どもたちがいるかもしれないと考えました。そうした時に、いわきの、福島の風景を描く、みんなで描いていく活動が、これまでの自分たち、またはこれからの自分たちを考えていく、もしくは支えていく一つの立脚点になるような記憶を作る時間になればという願いを込めました。そして、技術や画法より、思いをどう描くかに心を砕き指導されていました。

イメージを固めた生徒たちは、60センチ角のパネルに円を描き、その円の中にアクリル絵の具で、思い思いに描きました。制作時間4時間という短い時間でしたが、気持ちのこもった素晴らしい作品を完成させました。

「今回描いた場所が身近にあるもので、あるのが当たり前だと思っていましたが、みんなの話や先生の話聞いて、今あるものを大事にしようと思いました」「地元を見つめ直すきっかけになりました。円の中に絵を描くのは、初めての経験で楽しかった」など、参加した生徒たちの声からは、ワークショップが自分や地元と向き合う良い時間になったことが見てとれます。原発事故により手放さなければならなくなった牛を描いた生徒もいました。「あえて下手に描いた」という話を聞き、その胸の内を思いやらずにいられませんでした。

丸の中は、生徒たちが真摯にテーマと向き合い、自分に問い続けた心の中を表現したものです。展示会では、丸窓からそっと生徒たちの胸の中を見ていただくようなイメージで、「私の大切なふくしまの風景」を、ご覧いただきました。



参加者の感想

- ・アクリルで風景を描くのは、小中学校以来で子ども心に戻りながら楽しく描けました。
- ・たくさんの学びがあるワークショップでした、ありがとうございました。

- ・自分がただ描きたいと思って、牛小屋を描いていたけど、描いていくうちに思い出がよみがえってきて、楽しく描く事が出来た。

- ・今まで海外の風景の方が魅力に感じていたが、日常的にみる景色も、どのように見るかによってより深い魅力に気付けることを知れた。

- ・地元の風景を描く事で、改めて自分の周り、住んでいる所にはたくさんのいいところがあるんだなと思いました。

- ・「福島と私」というテーマで制作をして、福島が自分にとってどういう場所なのか考える事が出来ました。

- ・今回、福島県について描くとき、画像を調べていたら、改めて知ることがたくさんあったので、参加してよかったと思いました。

2 アート＆サイエンスで ふくしまの「大地」を描く

アートとサイエンスの両方の視点がハイブリッドに合体すると、
ふくしまの大地の形やイメージはどうなるの？
最先端の STEAM 教育※の視点から、絵具と粘土を用いた新たなアートの手法で、
福島県の地形を学びます。

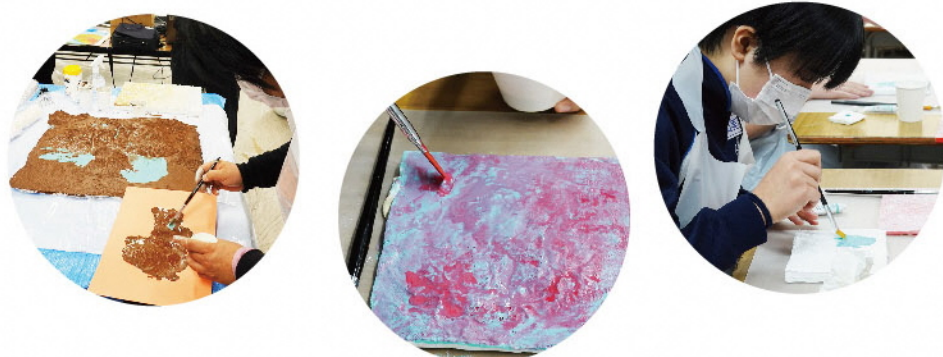
※読み方は「スティーム教育」。科学(SCIENCE)、技術(TECHNOLOGY)、工学(ENGINEERING)、アート(ART)、
数学(MATHEMATICS)の5つの単語の頭文字を組み合わせた教育手法。

- 2021.12.24 fri 福島市 福島市立吾妻中学校
- 2022. 1.15 sat 福島市 やのめ学童クラブ
- 2022. 2.1 tue 福島市 福島県立西高等学校

共同で福島の地形を学びながら 作品をつくるワークショップ

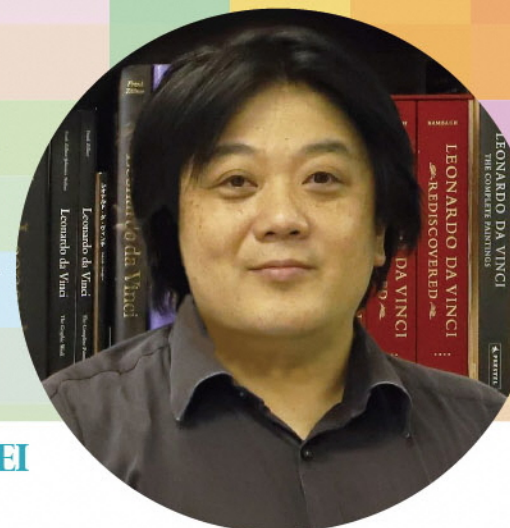
渡邊晃一さんのワークショップは、「アート＆サイエンスでふくしまの『大地』を描く」をテーマに、小学生の回、中学生の回、高校生の回と、計3回開催しました。

ワークショップで渡邊さんが特に大切にされたこととお聞きすると、「枠を設けること」と教えてくださいました。「実は震災後、様々なアートのケアを手伝っていく中で、心理学の先生方から『子どもたちが自由に描くと傷口を広げてしまう』というよ
うなアドバイスをいただいた経緯がありまして。ならば共同で学んでいくスタイルが良いのではと考えたのです。今回は、福島県という地域の地形を学びながら作品をつくるという枠を設けました。福島県で行われる授業であれば、子どもたちに福島県のことをたくさん知ってもらいたいと思って、最初に福島の形を描くところから始めました。」



講師 渡邊 晃一

福島市在住(北海道出身)。筑波大学大学院芸術研究科修了。福島大学人間発達文化学類教授。福島大学芸術による地域創造研究所所長。東京藝術大学美術解剖学研究室。エコール・デ・ボザール客員教授。身体や大地など幅広いテーマで絵画や現代美術の制作を行い、国内外での展覧会等で活躍。福島ビエンナーレなど県内の芸術祭を企画。『生命形態と美術教育～三木成夫の解剖学からの接近～』にて第30回 佐武賞(教育美術論文部門最優秀賞)を受賞。震災復興の「鯉アートのぼり」に取り組む(小学校の図画工作科の教科書に掲載)。近年は、レオナルド・ダ・ヴィンチ研究でも注目され日本テレビ等で監修。



KOHICHI WATANABE





「ステキ〜」「面白い〜」の大歓声
地形のポコポコ模様

ワークショップは、境界が書かれていない福島県とその周辺の地形図に、県境を書き込むところからスタートしました。母校が宮城県に入ってしまったたり、磐梯山が山形県に入ったり。「福島県の形がぼんやりしか分からなかったことに気がきました」と話す子も。「自然に県境はありません。山脈や川などによって会津地方、中通り、浜通りと地域が分かれています」と、渡邊先生。鳥の目になり地形から様々な情報を読み取るという興味深い話もしていただきました。

小学生の後半は、福島県の形を切り取り、絵具を塗り、乾かないうちに別紙に貼り付け転写させ、その上からクレヨンや絵の具で色を塗るという順番で、ふくしまの大地を描きました。思わぬポコポコ模様が現れると「ステキ〜」「面白い〜」の大歓声。学童クラブの先生と保護者の方は、「福島県をしっかりと形としてとらえたのは初めて。とても楽しく学ばせていただきました」「普段では経験させることが出来ない表現方法を体験させることが出来て良かった」と、話

していただきました。

中学生の後半は、3Dプリンターで成形した福島盆地付近の立体地図に、粘土を乗せて型を取り、凹んだところに石膏を流して複製を作りました。乾いた石膏の立体地図の山頂から、アクリル絵の具を含ませた筆で色を垂らすと、地形に沿って絵の具が流れ出し、みるみる福島盆地が現れました。「色を複数使うことで起伏が楽しめます」と渡邊先生。生徒たちは、思い思いに好きな色を重ねて作品を完成させました。

高校生の回は、「自分で発信していく福島県」ということで、福島県立体地図に夜光塗料を流して川筋を表したものに触れるなど、自然の形を学びながら最終的に福島県地形をテーマに、絵を描くというスタイルで進めました。

渡邊さんは全体を振り返り、「子どもたちの年齢に即して様々なプログラムを展開できたと思います。福島大学の学生のサポートもあり満足しています」と話しておられました。



参加者の感想

- ・吾妻山やその他の山などの良さが分かった。自然を大切にしようと思った。
- ・3Dプリンターで作られた物を初めて見ました。指紋のようで、とても細かく作れるのだなぁと思いました。

- ・改めて私たちの住む福島県自然の美しさや良さを気付くことができ、これまで以上に身近にある自然を大切にしようと思いました。
- ・地形を立体的にしたものに色々な色を染め、絵の具の流れを体験したことが面白かった。

- ・ポコポコにクレヨンで色を塗ることが楽しかったです。地形を使って作品を作れたことに感動しました。
- ・福島県の形がぼんやりしか分からなかったことに気がきました。絵の具やクレヨンでこぼこを表せたのが面白かったです。

- ・地形の“こぼこ”感慨深いです。“こぼこ”を感じてゆくことを伝えてゆきたいです。
- ・ふくしまを1つの作品として描くのは初めてだったのでとても楽しめました。

- ・今までで福島県をしっかりと形としてとらえたのは初めてでした。とても楽しく学ばせていただきありがとうございました。
- ・沢山の画材を使って、自分の考える福島県生命を表現することが出来て楽しかった。

- ・「福島にいのち」というテーマで描くというのが初めてで、とても楽しかった。3Dプリンターで印刷された福島県地形が染料で光った時は驚いた。
- ・アートを楽しみつつも地元を親しむことが出来て良かった。



3 タブレットで おもしろフォト・アート

タブレットのカメラなどを使って、不思議でおもしろい映像作品を作ります。
デジタルによるメディア表現を身近に感じられる
フォト・アートのワークショップです。

- 2021.11.13 sat 会津美里町 会津美里町公民館
- 2021.11.25 thu 福島市 福島市立福島第一小学校
- 2021.12.18 sat 会津坂下町 会津坂下町立坂下中学校



講師 高橋延昌

会津大学短期大学部産業情報学科准教授。筑波大学大学院修了。グラフィックデザイン、デザイン教育基礎造形が専門。広告、出版、印刷、パッケージ、PRデザイン、CGによる教育研究を行っている。地域ブランドや地域活性化の産学連携にも取り組み、奥会津地方・只見線沿線の活性化デザイン、自治体のイメージキャラクターやロゴデザインも多数。



NOBUMASA TAKAHASHI

長時間露光で撮る「光の軌跡」と 「トリックアート」にチャレンジ

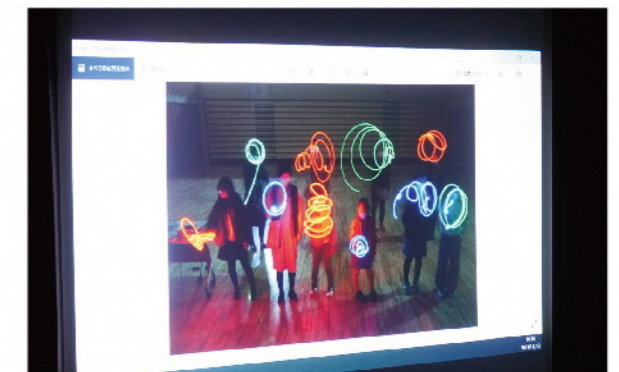
「タブレットでおもしろフォト・アート」は、会津美里町公民館、福島市立福島第一小学校、会津坂下町立坂下中学校で開催しました。子どもたちが撮った写真は、「どうやって撮影したの?」と聞かれたら、「それは秘密です」と答えたいような、不思議で面白いものばかり。みんなで相談し、工夫し合ったことも忘れ難い思い出として刻まれたワークショップになりました。

当日、最初のチャレンジは、部屋を暗くしてシャッタースピードを調整し、長時間露光で撮る「光の軌跡」でした。子どもたちはまず赤、青、緑のムギ球を1個ずつ持ち、文字と絵の担当に分かれて並びます。次に鏡文字の要領でムギ球を掛け声とともに動かすと…。あら不思議、「2021」や「2022」、花や星が、カメラのモニター画面に映し出されました。光をはっきりさせたい部分を確認しながら2度、3度と撮影していくうちに、どんどん上手に

なっていくのでみんな大喜び。

後半は、タブレットのバーストモード(連続撮影)や、構図に遠近法を用いるなど工夫を凝らした「トリックアート」に挑みました。

「タブレットのバーストモードを使うと、『人が飛んでいる』もしくは『飛ばされている』ようなシーンを撮ることができます。ほかにも遠近法を用いてモノと人とカメラの距離を工夫すると、大きさが変化して見える面白い写真が撮れます」と高橋さん。早速、撮る人と被写体になる人に分かれ、被写体は飛ばす人、飛ばされる人に分かれて連続撮影を始めると、本当に飛んでいるかのような写真が撮れるので、子どもたちはすぐに引き込まれていきました。もっと面白い写真を撮ろうと遠近法にも挑戦し、大きな穴に吸い込まれたり、手のひらに寝そべったり、踏みつけられそうになったり、^{ほうき}箒に乗って飛んだりなどなど、夢中になって撮り続けました。





デジタル機器を使って「時」を自在に楽しむ
普段できないような遊びを満喫した子どもたち

今回のワークショップに込めた願いを高橋さんは、「『光の軌跡』も『トリックアート』も、デジタル機器を使ってみんなで『時』を自在に楽しむ、その面白さを味わうことを意識しました」と話します。「タブレットを持っていても、子どもたちは今日のワークショップのような使い方は多分していないと思うので『遊ぶ』ことを大事にしました。普段しないような遊びができて、子どもたちも喜んでいました。」

子どもたちの感想も、「ワークショップの全部が楽しかった」「友達と一緒に上手に撮れるように考えてやってみたりしたところが面白かった」「光で文字や絵を描くのが面白かったので、もう一度やってみたい」など、フォト・アートの魅力を満喫したことが見て取れる声がたくさん寄せられました。



参加者の感想

- ・どんなふうに写真を撮るか想像してみるところや友達と一緒に上手に撮れるように考えてやってみたりするところが面白くて楽しかったです。
- ・カメラと小道具だけで、おもしろい写真やきれいな写真が撮れることがわかった。

- ・いつもと違う写真の撮り方をしただけで、いろんなふうに見えて楽しかった。
- ・光の残像を作ることや目の錯覚などを用いて写真を撮影するのが、とても楽しかった。

- ・ライトを使って絵を描く事が、楽しかったです。写真を撮る時にどうやったら浮いているように見えるか友達と一緒に考えたのも楽しかったです。

- ・みんなで協力して、一つの写真を作り上げたのがとても楽しかった。光の方は大変だったけれど星が上手にかけて良かった。

- ・ちょっとした工夫で楽しめるんですね。今度、孫と楽しみたい。
- ・みんなと一緒に写真を撮ったりアートが出来て、楽しかったです。

- ・色々なアートがあって楽しかった。
- ・光の写真がきれいでした。
- ・光の体験、見たことはあったがやってみて楽しかったです。



「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」
「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」

みんなのアート 作品展

県内外で活躍する6名の講師とともに創り上げた
参加者の作品を展示しました

2022年 2月1日(火)～2月6日(日) 会場：郡山女子大学建学記念講堂展示ロビー(郡山市)

2022年 2月19日(土)～2月21日(月) 会場：パセナカ・ミッセ 地域交流スペース(福島市)



会場のアンケートから

作品の出来栄が良かった。
郡山市 60代

おもしろ写真が、アイデアと
子どもの元気が詰まっています。
面白かったです。
いわき市 30代

前回よりもワークショップの
種類が増え、それぞれの
作品により作者の個性や
感性が強く感じられ、
楽しく見ることができた。
福島市 50代

参加者の皆さんの楽しさが
伝わってきました。
自分も参加してみたく
なりました。
郡山市

3.11の出来事が、
記憶にない世代に、アートによる
メッセージや福島愛を
残すことの大切さを感じます。
福島市 40代

子どもたちの自由な創造力が
素晴らしいと思いました。
二本松市 40代

素直に個性が表されている
と思った。
郡山市 60代

特に子どもたちの
福島についての想いを
作品から感じることができた。
福島市 50代

写真が良かったです。
福島市 60代

若い人はすごいな
自分があるし。
福島市 60代

それぞれ形になって、
良かったです。
喜多方市

それぞれの福島への思いが、
いろいろな表現方法を通して
伝わってきました。
とても良かったです。
福島市 10代



震災から11年。本年度、福島県が実施した「アートによる新生ふくしま交流事業」の取り組み「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」& 「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」を振り返りました。
当日は、携わっていただいた講師の方々にご参加いただき、芸術活動を通じた心の復興や生き甲斐の形成、そして、福島の未来を担う子どもたちの心豊かな成長を、どのように支援してゆくのかを考えました。

新生ふくしま アート・フォーラム

Zoomによる
オンライン開催

プロジェクトの振り返りと気づき

2022 3.27 sun 13:00-15:00

作品を作るプロセスこそアート

詩人・和合亮一さんのワークショップは、最後の朗読タイムで感極まる方がおられ、どの回も心に染みる時間になりました。今日は、宿題を持ってフォーラムに臨みました。実はある時、和合さんが「アートと癒しは違う」という話をされまして、以来、私なりに問い続けてきたのですが、今回フォーラムにご参加くださった皆さまのお話の中に、作品を作るプロセスこそアートだという解を見つけることができました。それは、アートで何かを作るのではなく途中の過程を共有し合うこと、理解し合うこと。さらにはばからず言えば、アートを手段に表出してくる物語を受け止め、抱えて生きるご本人の背中を押すというか、肯定するというか。そうした気づきを、次のステップにできたらと思います。 <事務局 菅野真談>

若い世代が関わると取り組みの意味が大きくなっていくのでは

「思い出の形を鑄造しよう」は、彫刻の制作工程の特徴として自然素材に触れながら夢中になる時間を大切にしてほしいと考えて計画しました。皆さんが手を動かし、対話しながら故郷の思い出などを共有する場に、自分も居られたことが印象深く残っています。今回のように学生がサポートに入って活動するような機会をこれからも作っていただけると、取り組みの意味が大きくなっていくのではと思いました。また、何かを作ることや、作ったものを理解し合うというのは、震災や被災ということに関わらず意味のあることだと思います。 <黒沼 令さん談>

新しい記憶を積み上げていくためにも専門家が積極的に行動

最初にこうしたワークショップができたことに感謝申し上げます。私からは、これらの取り組みを通して今後の活動を考える時、大事なことを3つお話します。まず、継続していくためにもアルチザン（職人）、専門家に対する敬意とつながりを大事にすること。もう一つは、アクト（行動）。福島における震災後のアートの活動は、新しい記憶を積み上げていくことが大事だと思っています。そのためにも専門家が現場に積極的に入って行き、活動に皆さんを取り込んで行く。その中で参加者は「考えるきっかけ」を得ることが出来ます。最後にアーカイブです。こうした活動に関わらなかった人たちにも、つながるものを作らないともつたない。福島県としてのアートのアーカイブを作って、発信していくような形を切望します。 <渡邊晃一さん談>

撮るだけでなく語り合うことで心のふれあいが生まれる

昨年を感じましたが、今年のワークショップも皆さんがすごく前を向いているという印象が大きかったです。新たな発見を探りながら撮るのですが、気がつくと自分の思い出と重なっていて、それをみんなと語り合えることがとても前向きだと感じました。私は、阪神淡路大震災を経験して震災のことを語れなかった時期がありました。ですので、語れることはとても前向きなことと感ずきます。震災前の風景や人生を重ねてきて感じていることなど、写真を介して語ってくださったことを、若い人や子どもたちも聞いて共有し合えるような、そんな場があるといいなと思います。 <山崎エリナさん談>

10代にも描くまでの背景と描き上げるまでの物語がある

今回の事業で取り組んだワークショップをスタッフの一人として、参加者のそばで複数回見ていくと、絵や写真など、表現の方法は違いますが重なってくる気づきがあります。今回は、「プロセス」でした。1枚の写真にも撮られる方の背景と撮るまでの物語があるように、ワークショップ「私の大切な福島の風景」で、テーマと向き合った16歳、17歳、18歳の高校生にも、描くまでの背景と描き上げるまでの物語がありました。大切な風景、場所を感じる言葉にならないものを、作品にするまでのプロセスは年齢不問。交流事業を次に進めていく時には、そうしたことを踏まえながら、個々の過程を共有できると良いと感じています。 <事務局 笠原広一談>

撮り方のコツを教えると喜んでチャレンジしていました

小学生や中学生を対象に、タブレットやデジカメを使って長時間露光で撮影したり、遠近法を用いて面白い写真を撮るフォト・アートを行いました。ワークショップで特に意識したのが「遊ぶ」です。最初に「デジカメとタブレット、どっちを使いますか？」と子どもたちに尋ねると、圧倒的に多かったのがタブレットでした。学校教育の現場で子どもたちは、一人1台タブレットを持っています。使い慣れているので、簡単なコツを教えると「我が意を得たり」といわんばかりにバーストモードなど、普段使わないような機能を自在に操作しながら面白い写真を撮ってたくさん撮ってくれました。 <高橋延昌さん談>

アートによる新生ふくしま交流事業「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」2021

制作・編集 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

デザイン 有限会社デザインングマール

主催 福島県

事業受託者 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

【お問合せ】

認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

福島県福島市三河北町 2-8 Coco Mezon1 階 B 室

TEL 024-563-1955 FAX 024-563-1955 E-mail info@f-jdi.com

ART FORUM PROGRAM

第1部：取組紹介

- ◆アートで広げるみんなの元気プロジェクト 活動報告
講師：山崎エリナ(写真家) 黒沼令(郡山女子大学短期大学部講師・彫刻家) 和合亮一(詩人・教員) ※事務局による代理報告
- ◆アートで広げる子どもの未来プロジェクト 活動報告
講師：高橋延昌(金沢大学短期大学部准教授) 渡邊晃一(福島大学教授) 齋正機(日本画家) ※事務局による代理報告
- 「福島子ども芸術計画」 ※事務局による代理報告 講師：中津川浩章(美術家) 小池アミゴ(イラストレーター) シーナアキコ(音楽家)
- 「おとなりアーティスト2021学校連携共同ワークショップ」 ※事務局による代理報告 講師：門馬美喜(アーティスト) 宮嶋結香(画家)

第2部：トークタイム

ワークショップ講師や参加者との交流